
真・恋姫†無双 ～天より智を授けられし者～

H L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～天より智を授けられし者～

【Nコード】

N0293X

【作者名】

H L

【あらすじ】

真・恋姫†無双の世界に黄月英として生まれた男が主人公の物語です。

因みにこの小説は作者の妄想及び夢やら希望やらが多分に含まれますので、お読みになる方は毒されないようお気をつけください。

と言うことで、オリ主オリキャラが許せない方、及び作者の妄想、駄文に付き合っていられない方は、お手元の『戻る』またはBAC

KSPACEキー等を押してこの作品から一刻も早く退避してください。

因みに桃園組が好きな方は桃園組の扱いの悪さに不快な思いをされる可能性があるので、この小説を読むことをオススメ出来ません。

第一回・オリキャラ紹介（前書き）

と言うことでオリキャラ紹介です。

今回紹介するのは、主人公の月英とその軍師、徐庶の二人です。

ネタバレ的なモノは含まれてませんし、読み飛ばしても構わない事がほとんどですので、読む読まないは読者様の自由です。

第一回・オリキャラ紹介

能力直は統率、武力、知力、政治、魅力の5つを1～6の6段階で表します。因みに6は呂布の武力や劉備の魅力等のチートクラスです。

黄月英 真名・夕

統率 4 武力 5 知力 6 政治 5 魅力 4

この小説での主人公、性別は何故か男。
武器は自作の改造弩で…名前はまだ無い。

性格は面倒臭がりで少し優柔不断…顔は本人曰く程々、世間では不細工と噂されているが…実物は噂と違い10人中8人が振り向く位には美形。

前世は日本人で高校、大学は工業系の学校に進学し、製造業に就職。
24歳の時に仕事の帰りに心臓発作で倒れ、そのまま死亡…。

氣の扱いに長けているので、一騎討ち等の時には氣を手や足、矢に纏わせ、相手に流れる氣の流れを読んで戦う。呂布とも10分程なら戦闘が可能。

徐庶 字・元直 真名・稲里

統率 5 武力 3 知力 5 政治 4 魅力 4

常に狐のお面を頭に着けている少女。

髪は桃色で、服装は水鏡女学院の制服、月英の軍師。

諸葛亮、鳳統と同じく水鏡女学院で学んでいたが、仕官先を探して劉表の元を訪れた際に月英と偶然出逢い、その時に何かを感じたらしく…そのまま月英に仕官する事に…今の武器は数打ちで無銘の剣。

第一回・オリキャラ紹介（後書き）

と言うことでオリキャラ紹介でした。

因みに作者の予定では、他にも数名オリキャラとして登場する予定ですので、合計で10人程は覚悟して読み進めてください。

第一話（前書き）

この小説は更新が不定期かつ、一話一話が短いことが多々あると思われます。

理由としては作者がその日の気分とノリで書いているからと言う事に成りますが…。

と言う感じに成りますが…それでも読んでいただけると言う方はこのままお進みください。

第一話

時は後漢王朝末期……皇帝の権威が衰退し、欲に眼の眩んだ宦官、領主等による圧政、相次ぐ飢饉等の天災、盗賊による略奪……それらの被害に遭う力無き民……そんな平和とは言えない乱世の兆しが見えだした時代。

そして今、一つの村が賊により滅ぼされようとしていた。

そこは荊州北部に位置する人口100人程の小さな村。賊に襲われればひとたまりもないであろうこの村には二人の英傑が居た。

一人は後に英雄をその知略で支える事になる軍師・徐庶…。

もう一人は後の世において『乱世の発明王』『発明の父』等と呼ばれる事となる英雄・黄月英。

これは一人の発明家が乱世を駆け抜ける物語。

「だつ旦那！ この村にもついに賊が……。ここ十数年襲われたことなんて無かったのに……って旦那あ、ちゃんと聞いてるんですかい？」

ここは荊州北部にある小さな村……。旦那こと俺の名前は黄月英……真名は夕だ。コイツの名前は知らん……と言つことでは今は村人A（仮）としておこう。

「賊が出たんだろ？」

「へえ、そうなんでさあ」

さつき村人A（仮）が言つたように、この村はここ十数年間賊による被害はない。……らしい……俺は良く知らん。

「はあ……この村に到着するまでに掛かると思われる時間と賊の数は？」

「数は80～100人、時間は四半刻程でさあ」

「100人か……賊が現れたのどの方向だい？」

「北の方でさあ」

今、この村で戦えるのは多く見積もっても40人程だろう。それもとどの者が戦闘経験の無い民間人だ……。対する賊は多少の差はあれど戦闘経験のある者達がほとんど……。つまりこの戦力差を覆すには策を弄するか罌に嵌めるか……。それ

以外に撃退の方法は無いだろう。

因みに俺の強さは程々だとは思う。 無双出来るわけじゃないが、その辺の賊に遅れをとるほど柔な鍛え方はしてないからな。

「君は今から稲里…徐庶の所に向かって欲しい」

「あのお嬢ちゃんがどうしただ？」

「徐庶に賊の襲撃が有ることと、これから俺が足止めに向かう事を伝えて欲しい。 頼めるかい？」

「別に構わねえだが…なしてだ？」

「徐庶なら多分、今の状況で最善の対応をしてくれるだろうからね」

「分かっただ」

そう言つて男は駆けていった。

「はあ…。 稲里が村の人集めて迎撃方法を考えて教え終わるまでの間くらいは足止め出来るといいんだけどねえ… ってことで、俺は賊の駆除も兼ねた足止めに行ってくるかねえ」

そう言つて月英もまたこの部屋を後にした。

その手に己が武器を携えて…。

第一話（後書き）

と言う感じで第一話でした。 やっぱ短いですねえ。

誤字脱字等のご指摘有りましたら感想にお願いします。

第二話

「この辺で待つか…」

俺は今、村から北に2里程進んだ森の中に居る…。

時間的に賊はこの辺りに居ると思う…。多分だが…。

今回の賊は100人…。恐らく賊は、俺が居るこの森を通って村に向かってくるだろう…。理由は至って単純…。何故ならこの森の両脇には断崖絶壁…。とまでは言えないが、切り立った崖があり、多人数での移動には的さない地形だからだ…。にしても、100人の賊相手に改造してあるとは言っても元はただの弩と矢が40本…。勝てる気が全くしないねえ。

まあ本来の目的は足止めな訳だし、何とか生きて帰れるとは思っているけどねえ。

「はあ…。俺一人でどこまで足止め出来るのかっ、ねえ」
ヒュンッ

「っ…」

「なっ…」

先ずは一人…。ってところかねえ。

「っ、野郎共ー！！あのヤローをぶっ殺せー！！」

「「「オオオー！！」」」

「おおっ、怖い怖いっことで三十六計逃げるに如かずってねえ」

とは言っても実際は隠れて一人ずつ消してくだけなんだけどねえ
…。

ってことで先ずは身を隠すとするかねえ。

・・・

月英が賊の足止めをしている時、村では徐庶を中心に着々と迎撃体制が整えられていた。

さすがに初めのうちは指揮を執るのが年若い少女と言うことで動きが悪かった村人達も、徐庶の的確な指示を聞くうちに段々と動きが良くなっていた。

「徐庶ちゃん、準備整ったよ」

「分かりました。皆さんは賊が来るまで持ち場で待機しててください」

「おう、任せとけ！」

私の名前は徐庶^{じょしゅ}、字は元直^{げんちく}、真名は稲里^{いなり}。

私は今、主である夕様の命で村の人を指揮して迎撃の準備をしている…と言つかしていた。何故過去形なのかと言うと、つい今しがた迎撃体制が整ったからだ……。

装備として今回は、夕様が直々にお造りになられた連弩と言う連射性の高い弩が14、獵などの時に村で使われている弓が18、槍が17本で合計49人分の武器が使用可能になっている。よって若く力のあるものには槍や弓、その余りと力は落ちてしまっても賊などとの戦闘経験のある老人や女性には連弩を持ってもらった。

これによりこの村の兵……と言っても所詮は民兵だが……は合計49人となっている。

「皆！ 月英様がお戻りになられたぞ！」

声のした方を見ると、夕様がこちらに向かって歩いてるのが見えた。

パツと見、怪我などは見えないようだが…。

「ご主人様、お怪我は有りませんか？」

「ああ、大丈夫だよ。」

それより迎撃の準備は整ってるかい？」

「はい。　つい今しがた整いました」

「そっかあ、それじゃあこのまま指揮は任せるね」

「ご主人様はどちらへ？」

「矢を受け取ったら村の人に混じって北門の周辺で戦ってくるよ」

「分かりました。　指揮は私にお任せください」

「ん。頼む」

そう言い残すと、ご主人様は矢を受け取って迎撃に向かっていった…。

・・・

村に帰って来ると、村の北門を中心に至るところで武器を手にした村人を目にした。　どうやら迎撃の準備はほとんど整っているようだ。

そんな事を考えつつ、稲里の所まで歩いて居るとすぐに稲里が見えてきた。

稲里から現状を聞いたところ、迎撃準備は既に整っているとのこと

とだったので矢を受け取り、村の北門まで歩いてきた。

「月英の旦那あ、俺達あ助かるんですかい？」

北門まで来ると、頭が少し寂しい事になってる男が話しかけてきた。

「そんなの自分達次第だよ。どんなに優勢に戦えても諦めたら勝てる戦いも勝てないだろ？ だから今は勝てる気でいないとダメだよ」

友情、努力、勝利な漫画雑誌に載ってた某バスケ漫画の監督さん曰く、諦めたらそこで試合終了らしいからねえ（笑）

そんな事を考えていると森の中から柄の悪い男達が雄叫びをあげながら走り出してきた。

第三話

「てめえ達あ、女以外はブツ殺せー！ 邪魔する奴あ容赦すんな
！！ ガキだろおと年寄りだろうと関係ねえ！ 血祭りにあげるお
ー！！」

「「「オオオオオオオオ！！」」」

この村の北に一里程進んだ辺りから広がる森、その中から雄叫び
をあげて、賊共が駆け出して来た。数はざっと数えて4〜50人程。
先頭を駆けているのは恐らく頭目だろう男。

「皆さん、一射目の準備を。発射は私の合図に合わせてください
！」

「「「おおおおお！！」」」

稲里の声が村に響き渡り、それに応える様に各所から声があがる。
稲里の合図にタイミングを合わせて放つために自分も狙いを定め
る。ターゲットは賊の頭と思しき男。

「三、二、一、斉射！！」

合図と共に何本もの矢が賊に降り注ぐ…俺の放った矢は、狙い通りに男に命中し、その男の命を奪っていた。

「皆さん、二射目の準備を急いでください！ ……三、二、一、斉射！！」

稲里の合図を受け、矢が賊に降り注ぐ…二度目の一斉射を受けた賊は、その数を20人程に減らしていた。

頭…多分だが…を失い、数をこんなに減らされても逃げ出さないうつて…こいつら極度の馬鹿か？ それとも何かしらの策でもあんのか？

そんな事を考えていると、賊が蜘蛛の子を散らすようにバラバラと別れ、退却を始めた。

その様を見ながら淡々と矢を放ち賊の数を減らしていると、賊が走り出してきた森から槍を手にした男達が数名飛び出し、賊を串刺しにしていく…。

それに呼応するかのように村からも、槍を手にした男達が賊の追撃に向かっていった…。

「ふう…ひとまずは完勝って所かねえ」

そう呟きながら賊が討ち取られていくのを見ると、どうやら最後の一人が討ち取られた様で、最後の賊を討ち取った村人A（仮）

が、『勝鬨をあげよー!!』とか叫んでいるのが聞こえ、村の人们が一斉に鬨の声をあげた。

その様を見ながら、一人あたふたしている人物見つけたので、話し掛けてみる。

「そんなにあたふたしてどうした？」

「えっ？ ご主人様？」

「うん。 ご主人様」

「そうですが…はあ」

「で、どうしたんだい？」

「えっと…報告で、賊の数は100人程と聞いていたのですが…さっき出てきた賊って50人位でしたよね？」

「うん。 それくらいだったねえ」

「つまり賊は、あと50人残っている計算になるんです」

「……………」

そう言えば報告ん時に減らした賊の数、伝えるの忘れてた気が…
……アハハハハ。

「その事なんだが、多分……」

「ご主人様？」

「その……報告の時に忘れたと言うか……報告した気になっていたと言うか……アハハハハ」

それを聞いていた稲里の額に青筋が……アレ？ めっちゃ笑顔だ……でもなんでだろ、満面の笑みの筈が恐怖を感じるんですが……ってか寒気がヤバイんですけど……。

「ふふ、ご主人様？」

「ハ、ハイ。 ナンデシヨウカ？」

アハハハハ……俺、明日生きてるかな……。等と私にも思っていた時期が有りました……。なんて現実逃避をしていると、村人A（仮）達が帰って来たらしく、俺達の方に走って来るのが視界に入った。

「旦那あゝ」

今の状態から一刻も早く抜け出したい俺は、村人A達を使い話を変えるべく村人Aに向き直り話し掛けようとするが、それを察してか稲里からの説教が開始されてしまった。

因みに今回の襲撃による被害は、軽い怪我をした者がほんの数名
ただで死者及び重傷の者が出なかった様で、この日村では宴が
催され、かなり盛り上がったらしい…。

何故『らしい』なのかと言うと、稲里の説教が夜が明けるまで続
き、終わったときには既に宴も終わり、ほとんどの者が眠りについ
ていると言う状態のせいだったりする。

第四話

「うう……み、水……」

俺は今、村人A（仮）の家に居る。 念のために言っておくが、この家には重病人が居るわけではない。

「だ、旦那あ……どうか水を……水をお恵みくだせえ……」

俺が今ここに居るのは、昨日の戦闘で何気に活躍していたコイツ……稲里が言うには村の代表らしい……に、ちよつとした話しをしようと思ったからなのだが……昨晚の宴で飲み過ぎたらしく、今は二日酔いで話せる状態ではないようだ。

「はあ……自業自得だ……諦めて話だけでも聞いて「うぷッ」……話しはまた後日、今日のところは失礼する」

「ちよ、旦那？ 帰るなら責めて水……うぷッ……」

後ろの方から何か聞こえた気がするが、今はスルーしたいなあ……吐瀉物にまみれるなんて、真っ平だし……ってことでス「ご主人？」

ルー……はさせてもらえないらしい。

「ヤダナア、冗談二決マツテルダロ？」

「では部屋から出ようとせずに、大人しくこちらに来て話を再開してください……水は私が取ってきますから」

それって最近流行りの俺を生け贄に稲里召喚……もとい生還とかってやつかい？

なんて冗談は置いとくとして……話を戻そう。

「では、話を再開しますね？ この際前置きとかは面倒なので省きますが……明日にでもこの村を出ていこうと思います。その際この村に連弩を幾つか寄付しようと考えているんですが、受け取ってもらえますか？」

「うう……旦那の造った連弩なら幾ら置いていっても構わねえだよ」

「そうですか……では、話すべき事は話しましたのでこれにて」

俺はうめき声をBGMにしながら部屋を後にした。

稲里を待たないのかって？ あいつは先に帰ってるよ。 何で分かるのかって？ だってあいつあの部屋にあった水差し持ってかなかったんだぜ？ 持ってくる気ゼロじゃん。

そんな訳で、俺もさっさと退散しないとねえ。

長居したんじゃ本当に吐瀉物まみれになりかねないからねえ

・
・
・

翌朝、俺達二人はこの村を発ち、旅を再開した。

旅の目的？ そんなの優秀な人材の勧誘と種蒔きに決まってるだろ？
どんな種を蒔くのかって？ 今は秘密さ。

目的地？ 人材って言ったら許昌だろ？ 洛陽も棄てがたいけど
な……。

第五話

「麻婆丼の並2つ！」

「あいよー！」

「じゃあ俺はこの親子丼ってやつの並で！」

「かしこまりました。少々御待ちください」

今、俺達は許昌にいる。

時間が跳びすぎだつて？　しょうがないじゃんか道中、何も無かつたんだからさ。

今は何をやってるのかつて？　見てて分かんないもんかなあ……まあ普通は分かんないか……今は屋台で丼物専門店開いて商売してるところだ。

何で許昌に来てまで商売してるのかつて？　そんなの優秀な人材に関する情報収集と資金集めを同時進行で進めるだよ。

成果はあつたかつて？　人材の方は微妙だったな……その代わりに商売の方は大成功だけど……。

「お待たせしました。こちらが麻婆丼です」

「ハイ。親子丼の並ね！」

そんな感じで接客していると、稲里が小さな声で話し掛けてきた。

「ご主人様……あの三人組……」

稲里の視線の先には三人の少女達が居た……一人は頭に太陽の塔っぽい人形を乗せた金髪ロングの少女……もう一人は眼鏡を掛けた真面目そうな少女……そして三人の中でただ一人、動きに無駄がない青い髪の少女……恐ろくかなりの手練れなのだろう。

「成る程……合格だな……」

「どうしますか？」

「どうするかねえ。稲里はどうした方が良いと思う？」

「少し強引になっても、ここで接触するべきかと」

「じゃあ、接触してみるかねえ」

「分かりました」

そうと決まれば早速行動に移す。

「その綺麗なお嬢ちゃん達、昼はうちでどうだい？」

「ふむ。良さそうだな……二人はどうする?。」

「そうですね〜良いんじゃないですか?。」

「ではこの店で済ませましょう。」

……………まあこれで第一関門は突破だな。

「採譜は………なっ！ 店主よ………注文だ、メンマ丼のめが盛りなる物を頼む。」

「風はこの麻婆丼の並みと言うので。」

「では、私も麻婆丼の並みで。」

「メンマ丼のめが盛りが1つ、麻婆丼の並みが2つですね？ 少々御待ちください。」

……………まさかノリで作ったメンマ丼を頼む猛者が居るとは………しかもめが盛りで………世界って本当に広いんだなあ………アハ、アハハハハ。

「稲里……あの三人組の事、任せても構わないか?。」

「分かりました。」

「頼む」

「それじゃあ店長。先にあがらせてもらいますね？」

「あいよ」

なぜ呼び方が店長なのかって？ 流石に店長と店員の関係でご主人様って呼ばせるのはちょっと……ねえ？

まあ、あの三人組の事は稲里に任せとけば多分大丈夫だろう……問題はむしろ俺だよな。一人でこの店回せるかな……。

・・・

三人組が店にきた次の日……俺は一人、陽も昇らないうちに宿を抜け、昨晚稲里に聞いた場所に来ていた。

そこは三人組が泊まっていると思われる宿屋……。

ここまで来たのは良いものの……どうやって呼び出すか……。

「ん、殺気でもバラ蒔いてみるか？」

「その必要は有りませぬよ。店主殿……して、こんな朝早くからどの様な用件で？ 夜這いにしてはずいぶんと遅いと思いますか？」

……」

どうやら呼び出す必要は無かったようだ……。
まあそれだけ強いって事なんだけどさ。

「昨日会ったばかりの人に夜這いする様な男に見られるとは……
心外ですねえ……。まあ夜這い云々の話はこの際置いておきましょう
……」
「……と言うことで用件についてですが……。本日はお話をしに来ました」

「ふむ、O H A N A S H Iですか……。その話とは言葉の方ですか？ それとも……。こちらですか？」

そう言うって少女は手にした槍を構えた。

「んー。俺としてはそっちは遠慮したいんですけどねえ……。まあ、
どっちでも構わないんですが……。そっちの話をするならやっぱり、
場所を移した方が良さそうですね」

「そのようですな」

それから俺達は許昌の街を出てすぐにある森の、少し開けた場所
まで歩いてきた……。途中、会話などは一切無く互いに無言のままこ
こまで来た。

「ここなら周りを気にせずに関えそうですね？」

「ふむ、そのようすな」

「そうですねまだ名乗ってませんでしたねえ……俺の名前は黄月英、月英と呼んでください」

「そうですねそうでしたな……私の名は趙雲、字は子龍と申す」

常山の昇り龍が相手とは……かなりキツい戦いになりそうですねえ全く。

「その名、しかと記憶しました……それでは尋常に……」

「うむ……」

「勝負！」 「参る！」

先に動いたのは趙雲。一気に距離を詰め、槍を突き出す。

月英はそれを紙一重でかわし、趙雲の鳩尾を狙って氣を纏った蹴りを放つ……。

しかし趙雲も後ろに跳ぶことで、余裕を持って蹴りをかわす。

「あの突きをかわすとは……店主殿も中々出来る様ですな」

「流石に手加減された突き位はかわせますよ？」

「これは少々本気を出さねばならないようですな」

「ええ。相手が無手だからと言って手を抜くのは駄目ですよ！　っと」

ビュン

「フツ！」

月英の放った右の蹴りを難なくかわす趙雲。

攻撃をかわされた月英は蹴りの勢いを利用して左の回し蹴りを放つ

「ハッ！」　「セイ！」

キーン

具足等、何も装備していないにも関わらず、月英の蹴りは槍で受け止めた趙雲との間に火花を散らせた……。

「ふーっ、流石に強いですねえ……体に当たる気が全然しませんよ……」

「ふっ、氣か……次はこちらから行かせてもらっ！」

「ええ」

「ハイハイハイハイー!!」

「フツ、無駄無駄無駄無駄ー!!」

「ヤバイな……かなり楽しくなってきた……」。

「ハアッ!」

突き出された槍を左手で弾き、彼女の右手を右手で獲える。

ガッ!

「くっ!」

「獲ったー!! 喰らえ! 一本背負いー!!」

「なっ!?!」

バァン!

「でもってそのまま腕十字!」

カラン……。

腕十字が決まったようで趙雲の手から槍が離れる……。

「勝負ありですね」

「……降参だ……まさか素手の者に負けるとはな……まだまだ修行が足らぬようだな……」

「ふう……趙雲さん、大丈夫ですか？」

「案ずるな、怪我はない」

「そうですか」

趙雲は少しだけ思案する様に黙ると……ぱつりと小さな声で呟いた。

「星だ……」

「良いんですか？」

「お主になら呼ばれても構わぬ」

「……分かりました。俺の真名は夕……この真名、星に授けま
す」

「その真名、しかと受け取った」

「それではそろそろ帰りましょう……」

「ふむ…… 勿論送っていただけるのだろう？」

「話したいことも有りますので構いませんよ」

こうして俺は星達が泊まっている宿まで、星を送っていくことになった。

・・・

「星ちゃん、昨日会ったばかりの方と逢い引きとはやりますね」

「ふっ、私にかかればこれくら「やめい！ 要らん誤解をばら時くな！」…… 真名まで交換した仲だと言うのに……」

「せ、星が殿方と逢い…… 逢いび…… ぶ…… っ！」

眼鏡を掛けた真面目そうな少女…… 戯志才と言う名前らしい…… 因みにもう一人は程立と言うらしい…… が突然、鼻血を撒き散らしながら倒れた。

「えっと…… この娘大丈夫なのか？」

「いつもの事ゆえ気になさるな」

「血い止まってない気がするんだけど……」

「お兄さん、気にしたら負けなのですよ」

なんだろ……二人とも戯志才の扱いが……いや、深く考えちゃダメな気がする。

あれ？ 血塗れで倒れてる戯志才さん見てたら戯志才さんの周りに白チヨークで線引きたくなってきた……。

「んっ……」

鼻血を出して倒れていた戯志才さんが、ゆっくりと瞼を開いき……焦点の定まっていない目で、俺を見上げてくる。

「大丈夫かい？」

「あ………」

鼻血で水分を失い過ぎたせいか、カサカサに乾いてしまっている唇は、何かを言おうとして震えている。

「稟ちゃん、稟ちゃん。今は無理しない方が良いと思うのですよー」

「ふむ。そう言うことで夕殿、昼にまた……」

うーん……そう言うことってどういう事なんだろ……まあ良つか。

「あー……うん。了解。っともし良かったら程立ちゃん達も来てね」

「ハイなのですよー」

「じゃあね」

三人と別れた俺は、稲里の待つ宿屋へと歩き出した。

「星ちゃん、星ちゃん。お兄さんとの仲はどこまで進んだのですかー？」

「ふむ………秘密だ」

「星ちゃんは意地悪さんですねー」

「……うう………う」

「ほら、稟ちゃん。とんとんしますよ、とんとーん」

「……う、うう……すまん」

「稟も復活したことだ、部屋に戻るとしよう」

「ハイなのですよー」

「分かりました……」

第六話

星と真名を交換した日の昼……俺達は昨日と同じ場所で店を開きながら、星達を待っている……。のだが、どうやら俺達は面倒事に巻き込まれるようだ……。

と言うのも、隣に店を開いている行商人と思われる父娘に対して、三人の柄の悪そうな男達がいちやもんを付けている……。まあそれだけならば言葉は悪いが、対岸の火事ですむのだが、その中の一人……背のちっさい奴がリーダーっぽい男に隣の屋台の売り上げも……とか言っているのだから、このままいったら確実に巻き込まれるだろう。

「おい。 兄ちゃん、話は聞いてただろ？ 痛い目に遇いたくなかったら出すもん出せや」

「はあ。 稲里は、コイツらどうしたら良いと思う？」

「……返り討ちにして警備の者に突き出すべきかと……」

「ごちゃごちゃ言ってねえでさっさと金出せや！」

そう言つて男は懐から一振りの赤黒く汚れたナイフの様なものとり出して、こちらに剣先を向けてきた……。 って短い短っ！？でも気が短い人って、頭が固いか悪いかのどっちかな気がするんだけど……今はそんな事はどうでも良いって？ 確かにどうでも良

い事だな……。

「ふう……、しょうがな「待てい！」……はあ」

声のした方を見ると、屋根の上には一人の少女……今朝手合
わせをし、真名を交換した星が紅く輝く愛槍を手に立っていた。

「だ、誰だっ！」

「ふっ、か弱き庶人に手をあげるなど言語道断！ そのような外
道に名乗る名などない！」

「おい、てめえらー！ 相手はたった一人だ！ たたんじまえ！
！」

「……あいつは普通に登場する事って出来ないのか？」

「出来ないんでしょうね……」

「はあ……あいつを仲間に引き入れるの今からでも辞めにするか
？」

「でも、腕はかなり良いんですね？」

「そうなんだよなあ……もうすぐやって来る動乱の時代……乱世
で一旗あげて成功するには、一人でも多くの優秀な人材が必要なん

だよねえ……」

「成る程……そう言うことですか」

稲里と話していると、稲里や星とは別の方から声が聞こえてきた。

「戯志才さんと程立さんですか……どうやら御二人も中々に……」

「風や稟ちゃんにまで手を出そうとするとは……お兄さんに対する認識を改めなければいけませんねー」

うーん……稲里のいる方から何故か冷たい空気が漂ってくるんだが……なんでだろ。

「ご主……店長？ 幾つかお聞きしたいことが有るので少しだけお時間いただけますか？」

「あーっと……お、お客さんも居るわけだし……今はちょっと遠慮したいかなあ……なんて……アハハハハ」

「私達の事は気にしなくても構いませんよ」

「お客様もこう言ってますし、構いませんよね？」

なっ！？ 戯志才さんに見捨てられた……だと！？ くっ……な

らば!!

「程立さん！」

「……………ぐー」

「なっ!？」

なんでこの娘は寝てるんだ？ さっきまで起きてて俺とも普通に話してたよな？

「ふふ、構いませんよね？」

この後、稲里が俺に事情聴取と言つ名の O H A N A S H I
をしたのは言つまでもないだろう……。

「風、稟……店主殿は何処に？」

「給仕の者が少し話があると連れて行きました」

「ふむ。 それでは話でもしながら待つと致すか……」

「ええ」

・
・
・

「お待たせしました。ご注文はお決まりでしょうか？」

「ん？ 店主殿がまだ戻っていないようだが？」

「星ちゃん。気にしたら負けなのですよ」

「ふむ。では、メンマ丼のめが盛りを頼む」

「私は牛丼の並みをお願いします」

「では風はこの親子丼の並みをお願いしますのですよ」

「じゃあ俺は麻婆丼のメガで」

「かしこまりました。少々お待ちください」

「……ツッコミされないのがこんなに辛いなんて……ってアレ？
目からしょっぱい水が……。」

「して、店主殿……話とはどのようなもので？」

「星もスルーですか……そうですか……。」

「はあ……簡単に言うと、君達の主候補に俺の名前も加えてもらえたら嬉しいなあって感じかな？」

「ふむ……」

「ああ、返事は今じゃなくても良いよ？」

「ええ」

「うむ」

「……………」

また寝られた！？

「仕方ない……か、食らえ！ てい！」

ビシッ！

「……………おおっ！？」

「話はちゃんと聞いてたっばいから良「お待たせしましたー！」……はあ」

「お兄さん、気にしたら負けなのですよ」

「うん。 そうだね」

「店主殿。 話は変わるのだが、店主殿はいつまでこの街に？」

「ん」。 明後日か明後日にも出ようかなあとは思ってるけど？。」

「向かう場所は決まっていますか？」

「目的地ねえ。 ん」。 決まっていけないけど、洛陽には行ってみたいんだよねえ……。 星達は？」

「私達は明日にでもこの街を離れて、陳留の刺史……。 曹操様、袁紹、公孫瓚の順に回ろうかと……。」

曹操だけ様なのは何故だろう……。 戲志才さんのお気に入り的な感じ？

「店主殿……。 気にしたら負けですよ？」

星って読心術まで使えるのか！？ それとも俺が分かりやすいだけなのか？

「お兄さん、気にしたら負けなのですよ」

「……。 そうみたいだね……。」

口に出さなくても伝わるなら話すのやめようかな……。

「店主殿。時には言葉に出さなければ伝わらぬことも有りますぞ?。」

「ソウデスネ」

やっぱり言葉に出さなくても伝わってる気がするんだが……。

「月英殿……気にしたら負けですよ」

俺が本気になればポーカーフェイスくらい……。

「店長……人間、諦めが肝心です。しつこい作者……男は嫌われますよ?。」

「今作者って………はあ」

気にしたら負けですね………流石にもう分かりましたよ………。

「話を戻しますが、何故俺達の予定を?。」

「もし良かったら同行を……と思ひましてな……」

「同行出来ず申し訳無い……」

「気になさるな。店主殿……では、そろそろ……」

「そうですね……」

「ええ」

「では店主殿……馳走になった!」

そう言い残して、星達は去っていった……。

代金を支払わずに……。

「三人の代金はご主人様のお小遣いからひいときますね?」

「……はい」

第七話

星達が許昌を出た数日後、俺達二人も許昌を後にし……後漢の首都、洛陽を目指して旅している。

旅は順調で、明日の昼頃には洛陽に入れる所まで来ていた……因みに移動手段は許昌で星に助けられた父娘が洛陽までの用心棒を探しているらしかったので、護衛を務める事を条件に荷馬車の荷台に乗せてもらっている。

「お兄さん。目的地が見えて来ましたよ？」

そう声を掛けて来たのは行商人の娘……名を張 世平……三国志の演義を知っている人なら一度は聞いた名前だろう……因みにパツと見た感じだが、外見はかなり可愛い部類だと思う……俺的にはだが……。

ん？ 稻里の背後に黒い何かが居るような気がするんだが……多分気のせいだろう。

「あれが洛陽……」

後漢王朝の首都、洛陽……流石に都と呼ばれるだけの事はある……
……大きさだけならだが。

「お兄さん達は洛陽に来るの初めて？」

「俺は初めてだよ。 稲里は？」

「私は二年ほど前に一度だけ」

「そうなんですか？」

稲里の言葉を聞いた張世平は目を輝かせて稲里を質問攻めにし始めた。

何を話しているのかって？ 生憎俺にはガールズトークに首を突っ込めるだけの勇氣は無いから詳しいことは分からんな。辛うじて阿蘇阿蘇に載ってた服がどうのって所だけは聞き取れたが、な。

こうしている間にも馬車は進み、俺達は洛陽へと入った……のだが、そこには俺の想像していた光景は無く、ただ大きいだけで活気の無い暗い町並みが広がっていた……。

「……………」

「……………」

どうやら稲里達も言葉を失ってしまったらしい。

それにしても人の数が少なすぎる気がするんだが……俺の気のせいだろうか？

「何か良くない事があったようですね……」

稲里も俺と同じ事を考えていたらしく、張世平達に聞こえない位小さな声で話掛けて来た。

「かもしれないねえ」

こんな状態で見付かるのかねえ……ホント。

・
・
・

その後、俺達は張世平達父娘と別れ、洛陽の街で情報収集と言う名の散策をしている……手分けして……。

成果は……まあ、ぼちぼちって所だな……。

その後も日が沈むまで聞いて回ったが、成果と呼べるのは稲里の持ち帰って来た、とある姉妹に関するものだけだった……良い方は……。

「本日の成果としては司馬姉妹が優れている……と言う事と、馬元義と言う者が宮中に侵入し、その罰で二日前に車裂きにされた……と言った所ですね」

馬 元義って言う……確か黄巾の乱でアツサリと殺された、黄巾側の工作員だったような……それで潜入された事を重く見た霊帝が三公やら司隸なんかに命じて、宮中の衛兵や民衆を調べさせて千人近くの人間を誅殺……その後、張角捕縛の命を下した……だったか？

「それで今、手引きの疑いが掛かってる人やその家族が広場に集められてるって事かねえ？」

「その様ですね」

もしかすると最悪な時期に来ちまったのかもなあ……となると、長居は無用……って所かな？

「明日の昼、司馬家に行くぞ？」 因みにそのまま洛陽を発つか
らそのつもりでな？」

「畏まりました……」

・・・

翌日……俺達は司馬家を訪ねた……のだが、一足遅かったらしく、陳留の曹孟徳に誘われ、仕官してしまったらしい……。

「ハア……、本格的に人が集まらない気がしてきてたりするんだが？」

「そうかもしれませんね」

笑顔で肯定されたら困るんだが……。

「ハア……いつそのこと曹操さんの所にも仕官してみるかねえ
……って言うか、どうして稲里は俺に仕えようと思ったの？」

「……しいて挙げるなら、他の方に仕えるよりも面白くなりそうだから……でしょうか」

面白くなりそうだからって……まあ、仕えてくれるだけでもありがたいんだけどねえ。

ん？ 給金はどうしてるのかって？ こんなんでも、普通に暮らせば今後生きてくのに十分な金は、持つてるからねえ。

「ハア……何が足りないのかねえ」

「……何を理想とし、何を成し遂げたいか……と言った事かと」

「理想……ねえ」

そう言えば他人に話したことなんていままでに一度も無かったかもな……。

「乱世に生まれた男が成し遂げる事って言ったらアレしかないわなあ」

「アレとは……？」

「もちろん天下統一だよ」

第八話

稲里に対して、天下統一を宣言してから一週間がたった……今度の旅の目的は俺と違って、優秀な人材を獲得している曹操さんを目見るべく、曹操さんが居る陳留を目指している。

現在俺達は、中々に大きい街に立ち寄っている。

「稲里、今日の昼はあの店で良いか？」

そう言っ
て俺が指し示すのは中々に繁盛しているっぽい大衆食堂……。

「ええ」

「んじゃ、決まりだな」

店に入った俺達は空いている席がないかと店内を見回していると、客の来店に気付いた店員が近づいて来たので話掛けてみる。

「すいません。空いてる席ってあります?」

「申し訳ありませんが、只今満席でして……相席でもよろしいでしょうか?」

「相席ねえ……俺は構わないが……どうする?」

「私も構いません」

「って訳だから案内してもらえる?」

「畏まりました」

そう言つて頭を下げ、席へと歩き始める店員についていく……すると、6人程が座れる円卓へと案内された。

そこには三人の先客が座り、採譜に目を通していた。

その中の一人……紫色の髪を二つに纏めた発育の良い少女、その少女の後ろに立て掛けられた『ある物』に目が奪われてしまった……。

「ド、リル? ……ってドリル!?!」

そこにあつたのは正しくドリル……。ヤバい、解体して中身を知りたい。できれば……いや、なんとかしても!

そしてこれの製作者も。

「これは……」

「ご主人様……まずは落ち着いてください」

「こんなの見せられたら落ち着くとか絶対に無理！」

「仕方ありませんね……」

生命の危機を感じるんだが……気のせいだろうか……まあ、気にしたら負けだよねえ。

「って事で……これバラしても良「セイー!」「ごふっ……」

俺はこのまま意識を手放した……。

・
・
・

翌日、目を覚ました俺を待っていたのは、私達と共に義勇軍を立ち上げ、現在各地方で暴れている黄巾を身に纏った賊を討伐しませんか?……と言う昨日の三人組からのお誘いだった……。

「はあ……俺が知らない間に何があったのか、ちゃんと説明してもらおうか？」

「はい……」

稲里の話によると、昨日の三人組……楽進、李典、于禁と言うらしい……が、この街に来たのは義勇兵を募り、義勇軍を立ち上げる為だったらしく、そこに一撃で相手の意識を刈り取る人物が出現……仲間に引き入れれば大きな戦力に……と思っただけ、勧誘……しかし既に自分は使える身であり、主の許可なく決める訳にはいかない。と言う訳で、稲里の主である俺に誘いを入れた……って事らしい。

「ウーン……稲里はどうしたら良いと思う？」

「……悪くない話かと……」

悪くない……か、確かに名を上げるのには良いのかもなあ。それに、もしかしたらあのドリルをバラさせてくれるかも知れないしねえ。

「それじゃあこの誘い、乗らせてもらおうかねえ」

稲里は無言で頷くと部屋から出ていった……恐らく、今決まった事を三人に伝えに行つたのだろう。

稲里が出ていってから気が付いたんだが……俺も一緒に行くべきだったんじゃない？ と考えるも、今更な話だと考え直して、これからの事を考えてみる……今この国では黄巾を頭などに付けた連中が各地に現れて色々とやらかして居る。例えば、集まって奇声を上げたり、チケツト売ったり、略奪したり、官軍を返り討ちにしたり……最後は官軍が悪いのか？ って言うか俺の知ってる歴史と違う気が……でもこれで良いのか？ 性別逆だし、女性にも字あるし……この辺の事って、やっぱ気にしたら負けなのか？

そんな事を考えていると勢い良く扉が開かれ、超絶からくり頂籍がどうのこうのと叫びながら、昨日の三人組の一人……恐らくは李典だろう……が、部屋に飛び込んできた。

何を言いたいのかわかった気がしないでもないが……一応は訊くべきか？

「……………そんなに急いでどうしたんだ？」

「お兄さん、ウチに頂籍將軍を譲ってくれへんやろか」

絡繰頂籍……俺がこつちの世界に産まれてから、初めて手掛けた絡繰人形……作つたのは今から三年程昔、作り出した数は二十数体……詳しい数と製作経緯は忘れた。

「絡繰頂籍か……手元には無いからねえ。残念だけど……」

「そりゃないわ」

「って言うかそれが目的？」

「ん？ そやけど？」

「……………」

「さいですか……」。

……

李典が部屋に来てから暫くして稲里達三人も俺の部屋に来た為、俺の部屋で今後の事を話す事になった……。

「まずは軽く自己紹介から始めようかねえ。って事でまずは俺から……名は黄月英、稲里……徐庶の主をしてる。詳しいことはおいおいな」

「次は私が……」

そう言って自己紹介を始めたのは楽進、字は文謙……身体に無数の傷があり、銀色の長い髪を後ろで一つに纏めたおさげの女の子……話を聞いた感じ、真面目な優等生と言った印象を受けた。

「次はウチの番やなあ」

次に自己紹介を始めたのは俺の部屋に飛び込んできた李典……字は曼成と言っらしい……紫の髪を二つに分けて纏めた、三人の中では一番発育の良い女の子……彼女曰く、『ウチの螺旋はただの螺旋やない！ 天を衝く螺旋や！』との事。

「やっと沙和の番なの」

最後に自己紹介を始めたのは眼鏡を掛けたそばかすが愛らしい女の子……名前は于禁、字は曼成と言っらしい。

自己紹介を済ませ、今後の事を五人で話しあった結果、何故か俺の懐から活動資金を捻出し、それでも足りない分は街で出資を募ると言う事に決まり、出資者と言う事で義勇軍の代表に選ばれてしまった。

今後の事を考えればこれが一番良いのだが、やはり懐が寂しいことになってしまったのは辛い。

そんなこんなで義勇軍を立ち上げる準備が始まったのだが……ウ

ーン……何かを忘れてるような……まあ大丈夫だろ。

そんな事より李典さんと絡繰談義に花でも咲かせましようかねえ
……あの螺旋についても聞きたいことがあるからねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293x/>

真・恋姫†無双 ～天より智を授けられし者～

2011年11月21日16時32分発行